

遠江の土器と銅鐸（予察）

石橋 茂登

はじめに

本稿ではおもに遠江における近畿式銅鐸と三遠式銅鐸が混在する状況に注目して、土器の型式と銅鐸の型式の広がりから地域間の交流を読み取る手がかりが得られないか考えてみたい。

近畿地方を中心に分布する近畿式銅鐸と、東海地方を中心とする三遠式銅鐸は、その分布の特徴に違いがあり、さまざまな意見があるとはいえ、それぞれ近畿の勢力、東海の勢力の範囲と関わると目されてきた。

東海地方の伊勢湾岸には弥生時代後期に山中式の土器がひろく分布し、西の近畿地方、あるいは東の東遠江およびそれ以东とは異なる、おおきなまとまりを示す。三遠式銅鐸の分布に示される集団間のつながりと、共通する土器様式にうかがえる地域間関係とはある程度の相関があると考えられる。

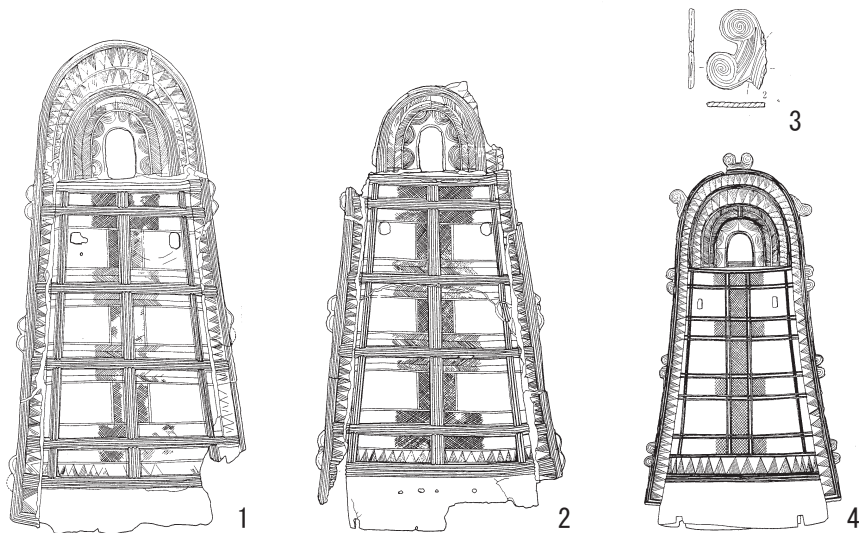
遠江ではとくに西遠江に多く銅鐸がみられるが、そこには三遠式銅鐸だけではなく、近畿式銅鐸が多数存在している。土器が伊勢湾沿岸を覆う山中式の範疇で考えられるのに対し、銅鐸は三遠式銅鐸一色ではないのである。では、近畿式銅鐸が三遠式銅鐸に混じって存在することはどのように考えるべきであろうか。銅鐸が近畿地方からの搬入品であるならば、土器においても同様な様相が看取されるに違いない。もしそうでないならば、それはそれで移動の背景を考える材料となる。

平成 24 年（2012）9 月、静岡県松東遺跡で近畿式銅鐸の鈕の大型破片が発見された〔浜松市文化財課 2012〕。松東遺跡周辺はすでに市街化されていて遺跡の状況は必ずしも全容がわかるわけではないが、環濠をもつ集落が形成されていたことが知られている。松東遺跡では過去にも近畿式の飾耳破片が出土していることから、2 口以上の近畿式銅鐸がこの遺跡に存在していたと目される。

ところで注目されるのは、松東遺跡の銅鐸破片が出土した地点から 500m ほどしか隔たっていない木船の地で、明治 41 年（1908）に三遠式銅鐸 2 口が出土していることである（第 1～3 図）。両出土地はいま歩いて 10 分ほどの至近距離である。また両者の中間にあたる森西遺跡では、銅鐸の鈕を



第 1 図 静岡県浜松市松東遺跡周辺図 1 木船銅鐸出土地 2 森西遺跡 銅鐸型土製品 3 松東遺跡 近畿式飾耳 4 松東遺跡 近畿式鈕 (1:15000)



第2図 1木船(1号鐸)三遠式 2木船(2号鐸)三遠式 3松東遺跡 近畿式飾耳 4穴ノ谷 近畿式 (1・2・4 1:12 3 1:6)

模した土製品の破片が見つかった。このような隣接地に近畿式銅鐸と三遠式銅鐸の両方が存在したことは、両種の銅鐸の性質について考察する手がかりとなる。また松東遺跡の近畿式銅鐸は破片で出土し、木船の三遠式銅鐸が完形で出土したことは、前者が破壊され、後者は埋納された可能性を示している。近畿式銅鐸と三遠式銅鐸の取り扱いについては、近畿式銅鐸だけが破片化されている（破片での出土例がある）ことから、祭式や取り扱いに差があり、近畿式は破壊後の破片の取り扱いに規制があったとみられている〔難波 2005〕。そのような点からも松東遺跡出土の銅鐸破片は注目される資料であるが、ここでは銅鐸の祭祀には立ち入らず、近畿式と三遠式の両型式が存在することと、土器の様相をみてみよう。

1. 遠江の銅鐸

銅鐸の型式分類は難波洋三（難波 1986）に従う。近畿式銅鐸は、近畿地方の周辺を中心に分布する銅鐸群であり、鈕の双頭渦文飾耳がもっとも目につく特徴である。突線鈕式は文様への突線の用い方を指標に1～5式に大別されるが、実際は突線鈕2式以降が近畿式の分類となっている。軸突線の



第3図 静岡県木船銅鐸出土地（中央奥が木船神社）

導入は突線鈕4式以降である。三遠式銅鐸は、三河・遠江を中心に分布する比較的画一的な銅鐸群である。鈕に双頭渦文飾耳がなく、袈裟襷文には軸突線を伴い、突線と細線を組み合わせて用いる、交互鋸歯文を用いるなどの特徴をもつ。難波によると近畿式銅鐸との並行関係は三遠1式が突線鈕2式、三遠2式が突線鈕3 I a式、三遠3式が突線鈕3 I b式、三遠4式が突線鈕3 II式である。すなわち三遠2～4式は突線鈕3式となる。さらに三遠3式末から4式は、軸突線などが多条化する伊奈型と、その特徴がない中根型にわけられる。

出土地		型式	発見年
1	遠江 掛川市長谷 小出ヶ谷	1 突線鈕 2か 3式	三遠式 1772
2	遠江 浜松市三方原町	1	三遠式 1787
3	遠江 湖西市白須賀 鍛冶ヶ谷	1 突線鈕 5式	近畿式 1801
4		2	近畿式
5	遠江 浜松市三ヶ日町釣荒神山	1 突線鈕 3式	三遠 3式 1838
6		2 突線鈕 3式	三遠 2式
7	遠江 浜松市南区芳川町ツツミドオリ	1 突線鈕 3式	三遠 3式 1868
8		2	
9	遠江 浜松市細江町中川 船渡	1 突線鈕 3式	三遠 2式 1880
10		2 突線鈕 2式	三遠 1式
11	遠江 磐田市敷地	1 突線鈕 3式	三遠 3式 1890
12		2 突線鈕 3式	三遠 2式
13	遠江 浜松市和田町永田 木船	1 突線鈕 3式	三遠 3式 1908
14		2 突線鈕 3式	三遠 3式
15	遠江 浜松市細江町中川 悪ヶ谷	1 突線鈕 3式	三遠 3式 1912
16	遠江 浜松市細江町小野 日向郷 (常道)	1 突線鈕 3式	三遠 2式 1933
17	遠江 浜松市三ヶ日町釣山田 (分寸)	1 突線鈕 4式	近畿Ⅲ A 1950
18	遠江 浜松市三ヶ日町日比沢・猪久保	1 突線鈕 4式	近畿Ⅲ B 1965
19	遠江 浜松市細江町中川 滝峯・七曲り	1 突線鈕 3Ⅰ b式	近畿Ⅱ A 1966
20		2 突線鈕 3式	三遠 2式 1966
21	遠江 浜松市細江町中川 不動平	1 突線鈕 3Ⅰ b式	近畿Ⅱ A 1967
22	遠江 浜松市南伊場町伊場遺跡梶子地点	1 突線鈕 3Ⅰ b～3Ⅱ式	近畿 1983
23	遠江 浜松市細江町中川 穴ノ谷	1 突線鈕 3Ⅱ a式	近畿 2C 1 1987
24	遠江 浜松市都田町前原 前原Ⅷ遺跡	1 突線鈕 2式	三遠 1 1987
25	遠江 浜松市細江町中川 滝峯・才四郎谷	1 突線鈕 2式	近畿 1C 1 1989
26	遠江 浜松市天竜川町 松東遺跡 2次調査	1 突線鈕 3Ⅰ a～3Ⅱ a式	近畿 1990
27	遠江 磐田市敷地 西の谷 (敷地 3号)	1 突線鈕 3式	三遠 3式 2000
28	遠江 袋井市 掛之上遺跡	1 突線鈕 2式か 3式古段階の可能性	2001
29	遠江 浜松市天竜川町 松東遺跡 3次調査	1 突線鈕 2式	近畿 2012
30	伝遠江 浜松市浜松南海岸 (南方海浜)	1 突線鈕 3Ⅰ b～3Ⅱ式	近畿
31	伝遠江 遠江国	1	三遠式
32	伝遠江 引佐郡細江町中川・コツサガヤ	1	1912
33	伝遠江 引佐郡引佐町・井伊谷	1	横型流水文

第1表 遠江の銅鐸出土地

遠江での銅鐸出土を概観しよう (表1)。破片、伝遠江を含め、26件33口が知られている。2口一組が7例あること、半数が突線鈕3式で占められることが特徴的である。

三遠式銅鐸は三河・遠江に多くみられることから付けられた名称である。遠江の中でも分布に集中がみられ、天竜川以東の遠江東部では、天竜川からさほど隔たらない場所 (敷地、長谷) に計4口が見られるのみである。これに対して天竜川以西では浜名湖北岸、とくに浜松市の三ヶ日町から細江町にかけて多く分布している。

また注目すべきは、三遠式と近畿式の双方がみられることである。ひとつの谷筋に両者がみられる例として、浜松市北区細江町の中川・滝峯があげられる (第4図)。悪ヶ谷 (三遠式)、七曲り (近畿式・三遠式)、不動平 (近畿式)、穴ノ谷 (近畿式)、才四郎谷 (近畿式) という多数の銅鐸埋納が、谷の

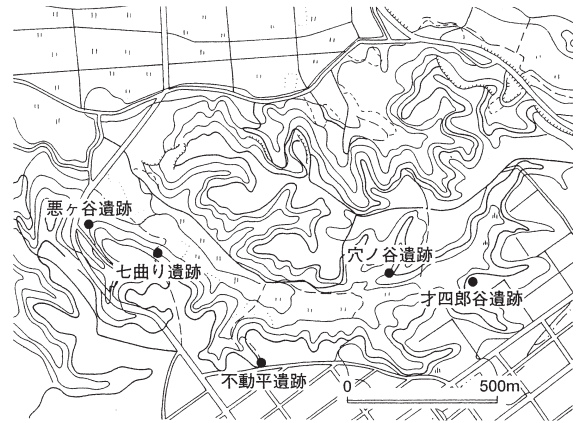
なかに点々と築かれている。このうち滝峯・七曲りは、30 mしか隔たっていない隣接地から三遠式と近畿式が出土した。三遠式と近畿式をきわめて近接して埋納している。この2口を含め、すべてを単独で埋納している点も注意される。また、銅鐸の型式はいずれも突線鈕2～3式である。銅鐸を掘り出し再埋納したと伝承されるコツサガヤもこの地にあたる。

これらは一括埋納ではなく単独埋納の集積だが、おなじ谷に至近距離で埋められていることからすれば、埋納した主体は同一者（同一集団）であったと考えてよいし、近畿式と三遠式は混用されうるもの、あるいは宗教的な土地のなかで両者が並び存することができるものであったと考えることができる。

周辺地域に目をむけても、三遠式銅鐸の分布範囲内における三遠式と近畿式の分布は明確に排他的とはいえ、混在している。

渥美半島だけは近畿式銅鐸のみが発見されている。田原市堀山田（突線鈕4式近畿式、近畿式飾耳破片）、同市椈（突線鈕5Ⅰ式近畿式、突線鈕5Ⅱ式近畿式）である。記録だけが残る同市の村松（3尺4寸）、谷ノ口（3尺7寸）は大型なので近畿式の可能性が高い。

浜松市滝峯は先述したように狭い谷の中に三遠式と近畿式が混在している。同じく先述した、集落遺跡にともなうと考えられる浜松市松東遺跡（近畿式）と木船（三遠式）の出土地も指呼の距離である。これらのように、山丘あるいは谷に埋める場合でも、集落近傍の場合でも、三遠式と近畿式の両者はごく近くに存在していたということになる。つまり三遠式銅鐸の分布範囲内においては、三遠式も近畿式もともに持ち込まれていたのである（同時に使用されたかどうかは別途検討が必要であるが）。近畿のどこか、東海のどこかから、集団間関係の中で銅鐸が運ばれているのであれば、きっとそれぞれの地から運ばれてくるのは銅鐸だけではないだろう。銅鐸のみの一方通行でもないだろう。そこで土器に着目してみる。



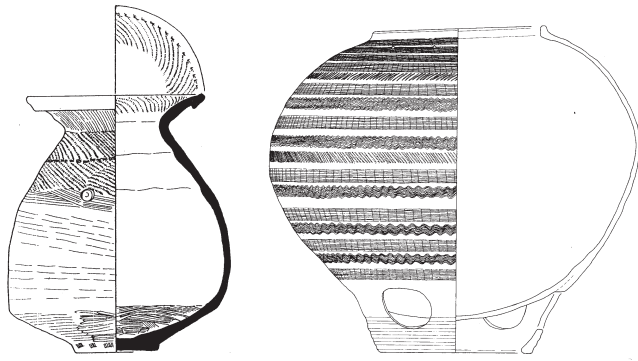
第4図 静岡県滝峯

2. 土器の様相と銅鐸

遠江・三河の土器は伊勢湾沿岸の大枠の中で考えることができる。

遠江の土器においては、弥生時代中期中葉から天竜川が遠江西部と東部を分ける明瞭な境界となり、それが弥生時代終末まで一貫して続く〔静岡県1992〕。遠江西部は三河の瓜郷式土器の分布圏になる。つまり三河と遠江の土器様式からは両地域の強い関係が窺われる。中期後葉も同様に、遠江西部は三河の長床式土器の分布圏内とされる。とはいえ『弥生土器の様式と編年』によるとⅢ-3様式までは壺甕ともに成形や施文手法に三河との共通性が強いが、Ⅲ-4様式では両地域の差が顕在化する。第Ⅳ様式では凹線文系土器の影響で形態や文様が変化し、隣接地域との共通要素も指摘される。

後期前葉の第Ⅴ様式になると遠江西部の土器は伊勢湾沿岸にひろくみられる山中式の範疇で捉えられる伊場式土器となる。三河の寄道式土器と伊場式土器とは細部では差異が指摘されているが、大きくは関連性の強い土器といえよう。鈴木敏則は西遠江の広口壺A型式は搬入品しかないとみており、山中式の器台については尾張に多く存在することに対し、西遠江では皆無に等しく、三河でもご



第5図 1 城屋敷遺跡 (1:6) 2 波瀬B遺跡 (1:8)

じてみられ、遠江西部の土器とは明らかに異なっていて、天竜川より西が三河と一貫して共通性を示すことと対照的である。弥生時代後期後葉になると、遠江西部は三河の欠山式土器の分布圏となり、やはり遠江東部とは異なっている。このように遠江の東西で土器様式は大きな差をもちつづける。その一方で、後期になると土器が遠隔地に運ばれて地域間交流が活発化した様相も指摘されている。東遠江の壺・高杯など一定量が西遠江にもみられることから、地域間の交流は継続的に行われていたと考えられる〔加納・石黒 2002〕。銅鐸の分布は天竜川がほぼ東限となっていて、先述したようにそれより東では計4口があるのみである。つまり三河の影響が強い土器分布圏の東限と、銅鐸分布圏の東限がほぼ一致しているのである。そして、銅鐸分布圏を越えて東の遠江東部や駿河には、小銅鐸、銅鐸飾耳が見られる。土器からは天竜川を境として三河・西遠江と東遠江が大きく異なる様相を示しつつも地域間交流していることを窺えるように、青銅器においても直接の強い影響ではないが、ある程度の交流があつて文物が移動していることが知られる。

近畿式銅鐸の祭祀の終焉は、徳島県矢野遺跡の銅鐸埋納坑出土土器から後期後葉かその少し後、おなじく近畿式銅鐸が破片化して廃棄された時期は、遠江の浜松市松東遺跡・伊場遺跡や三河の豊橋市西側遺跡の共伴土器から、西遠江の山中式新段階から欠山式のころにあたり、庄内式の直前から一部庄内式にかけて破片化したとみられている〔難波 2005〕。三遠式銅鐸の終焉は近畿式より先と目されることからすると、三遠式銅鐸に関わる土器はおおざっぱにいつて後期を主とするということになるう。

先述のように、三河地方において渥美半島には近畿式銅鐸しか見られず、浜名湖沿岸から豊川あたりにかけて近畿式銅鐸と三遠式銅鐸の両者があることとは対照的である。渥美半島の伊勢湾対岸にあたる伊勢には近畿式（高茶屋）と三遠式（専修寺）の両方がある。さらに近畿地方に近づくと、伊賀には比較的新しい近畿式銅鐸しか存在しない。比土（突線鈕3 I b 式近畿式）、湯舟（突線鈕4 式近畿式）、西場谷C 遺跡（突線鈕式近畿式鱗残欠）、伝千歳（突線鈕式近畿式飾耳残欠）である。

このような状況から、一つの可能性として、近畿式銅鐸をもたらす経路として、畿内方面から伊賀を経て、渥美半島を経由して三河・遠江にいたる経路が存在したことが想定される。赤塚次郎（赤塚 1993）は山中式土器を考察する中で、大和から伊賀をへて伊勢へむかうルートは律令期以降に本格的に活用されたとして、熊野灘を経由するルートを主要な東西交通の経路として想定している。もちろんそのような経路もあったであろうが、やはり内陸をつたう畿内から伊賀、伊勢、遠江へと続く経路も考えておくべきであろう。やや時期が新しいが、それを証明するかのよう、伊賀の名張市城屋敷遺跡ではVI-3 期とされる遠江からの搬入品の壺がある（第5図-1）。伊勢では度会郡玉城町の波

く稀として地域差を指摘した〔鈴木 1988〕。また山中式段階の西遠江では二重口縁状の脚部をもつ装飾高杯が特徴的に分布している。これらから、このころかなり広域に土器が移動していると同時に、共有型式に示される強い影響関係だけでなく、地域ごとの独自色も生じていることが知られる。

後期中葉には西遠江の土器が伊場式（新）となり、三河の欠山式土器に近い一群とされる。これらに対して遠江東部は菊川式土器が弥生時代後期を通

瀬B遺跡で、畿内色が強いとされる台付無頸壺(第5図-2)などが出土している。近畿式銅鐸は伊賀、伊勢、遠江へと東へ移動しており、近畿式銅鐸とともに土器にも畿内からの影響がうかがえる。一方で遠江の土器は遠江から伊賀へと西へ移動しているものがある、ということである。

また後期の山中式にみられる器台に関して、鈴木敏則は伊勢には尾張と同じ山中型器台がある一方で、畿内第V様式風、あるいはその影響の強い器台がみられると指摘している〔鈴木1988〕。伊勢には三遠式と近畿式の両方の銅鐸があるが、銅鐸とおなじように、伊勢の器台には尾張と畿内の双方とのつながりが看取できるのである。

これらはわずかに例示できた事例にすぎないが、おなじように土器が西から東へ、東から西へと移動していたことは容易に考えられる。それらは人・物の移動や交流の反映であろう。

おわりに

弥生時代後期の伊勢湾沿岸にひろく共通し特徴づけている山中式土器と三遠式銅鐸から、伊勢湾沿岸に政治的あるいは経済的、宗教的なまとまりが形成されていたという見方は広く敷衍している。しかし一方で土器には地域ごとの差異がある。銅鐸は三遠式だけではなく近畿式が混在している。銅鐸が集団間のつながりを示すようなものならば、三遠式と近畿式が併存する三河・西遠江は、伊勢湾沿岸の紐帯にも畿内を中心とする紐帯にも接続していたと考えるのが順当であろう。伊勢湾沿岸のなかでも紐帯の強さに地域差があったと予想すべきであり、尾張に銅鐸が少なく三河・西遠江に多いことは、伊勢湾沿岸の紐帯が強固であったが故に周辺部に銅鐸が多いのではなく、逆に畿内との競合のなかで不安定要因が多いゆえに働きかけが強かったとみることもできるのではなかろうか。

各地域同士の地域間交流は、土器の搬入が如実に実態をしめすであろう。今後さらに類例をあつめて検討していきたい。

引用・参考文献

- 赤塚次郎 1993「山中式というデザイン」『考古学フォーラム』3
- 石橋茂登 2012「銅鐸埋納地の占地について」『文化財論叢Ⅳ』奈良文化財研究所(刊行予定)
- 上村安生 2002「伊勢・伊賀地域」『弥生土器の様式と編年 東海編』木耳社
- 梅原末治 1985『銅鐸の研究』増補版 木耳社(原本1927)
- 加納俊介・石黒立人 2002『弥生土器の様式と編年 東海編』木耳社
- 佐藤由起男・萩野谷正宏・篠原和大 2002「遠江・駿河地域」『弥生土器の様式と編年 東海編』木耳社
- 静岡県 1992『静岡県史 資料編3』
- 静岡県教育委員会 1979『静岡県遺跡地図』
- 鳥根県教育委員会・鳥根県埋蔵文化財調査センター・鳥根県古代文化センター 2002『青銅器埋納地調査報告書』Ⅰ(銅鐸編)
- 鈴木敏則 1988「山中式三河型(寄道様式)」『三河考古』1
- 名張市教育委員会 1985『城屋敷遺跡』
- 難波洋三 1986「銅鐸」『弥生文化の研究』6 雄山閣
- 難波洋三 2005「銅鐸の埋納と破壊」『西側遺跡(1)』豊橋市教育委員会
- 難波洋三 2007「難波分類に基づく銅鐸出土地名表」『難波分類に基づく銅鐸出土地名表の作成』平成15年度～18年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書
- 浜松市文化協会 1990『松東遺跡Ⅱ』
- 浜松市文化財課 2012『松東遺跡発掘調査現地説明会』
- 三重県埋蔵文化財センター 1992『波瀬B遺跡発掘調査報告』

図版出典

- 第1図 静岡県教育委員会 1979 を元に作成
- 第2図 静岡県 1992
- 第3図 筆者撮影
- 第4図 島根県教育委員会ほか 2002
- 第5図-1 名張市教育委員会 1985
- 第5図-2 三重県埋蔵文化財センター 1992